スジブト型イオウヒロハシリグモ (仮称) の系譜

中 平 清

高知県吾川郡春野町芳原600

Synopsis

NAKAHIRA, Kiyoshi (600, Haruno-cho, Agawa-gun, Kochi, Japan): Genetic polymorphism found in the species "*Dolomedes sulfureus* L. KOCH" (Araneae: Pisauridae). *Acta arachnol.*, 27 (Special number): 45-49 (1977).

1. As the result of rearing the young of an undetermined Japanese spider *Dolomedes* sp. (♀) closely resembling "*Dolomedes pallitarsis* DÖNITZ et STRAND", spiderlings appeared with two different types of color pattern. One was similar to their mother and the other was no doubt *Dolomedes sulfureus* L. KOCH.

2. In comparison between female adults of both *D. sulfureus* and the undetermined *D. sp.*, the two types could not be discriminated by the shapes of their epigyna and sizes of their eyes. In view of this fact, *Dolomedes sulfureus* seems to be a polymorphic species.

イオウヒロハシリグモ *Dolomedes sulfureus* L. KOCH
の体色には、黄色から灰黒色まで種々の変異があり、また、背甲から腹背に褐色や黒褐色の条斑を有するものや、腹背に対をなす白色円斑が縦に並んでいるものなどがある。これらの体色は若い個体では薄く、成長したものでは濃くなる傾向があり、斑紋は成長するにつれて不明瞭となり消失する傾向が強いことはよく知られたところである。

ところで、ここに記すものは、上に述べたような体色斑紋の変異型ではなく、別種かと思われる程の色彩・条斑をもった個体についてであり、又、今まで、イオウヒロハシリグモという種個体の中にはいっていなかった個体の発見小史でもある（と、私は思っている）。

イオウヒロハシリグモに混って、第1図⑪のような条斑を有する大形（25 mm～30 mm）のハシリグモが棲んでいる。（※以下①、②……と記したものは全て第1図に示すものである。）スジブトハシリグモに似た条斑を有するクモである。一見、緑褐色の体に巾の広い白色縦条が1対あるように見えるスジブトハシリグモに対して、これは、帯紫赤褐色～黒褐色の体に、巾の狭い白色縦条が1対浮き出ているように見える案外綺麗なハシリグモである。スジボケハシリグモにも似ているが、図鑑などには載っていない（？）クモである。

外雌器を見たが、私には、イオウヒロハシリグモのそ

第 1 図

第 2 図

れと区別し得なかった。第2図の上に示したものがイオウヒロハシリグモの外雌器であり、下2つは問題のハシリグモの外雌器である。それやこれやで、このクモは、イオウヒロハシリグモの色彩変異個体ではなかろうかとの疑いをもたれた。昆虫類には、テントウムシのように色彩多型の手本のようなものがある。クモにも多型が知られている。アズマキシダグモがその良い例である。このクモは、つい此の間まで4つの種に分けられていたが、研究の結果、同一種であることが判明して、アズマキシダグモに統一せられ、色彩・斑紋の違いによって、アズマ型・タテスジ型・キスジ型・ヤマジ型と呼ばれることになった。(キシダグモ属の検討、有田立身・八木沼健夫, *Atypus* No. 63, 1975)

この大きくて美しいハシリグモも、こうした色彩多型の中の1つではないかと私は直観したのである。数人のクモ研究者に、実物を示して話してみたが、皆否定的であった。イオウヒロハシリグモとはあまりにもかけ離れた色彩と条斑とをもっているからであろう。

条斑がスジプトハシリグモに似ているので、念の為、両者の外雌器を比べて見ると全く違っていた。又、単眼を比較したがやはり違っていた。即ち、スジプトハシリグモの前中眼は前側眼よりもかなり大きいものに対して、この個体及びイオウヒロハシリグモの前列眼は同大であると見えた。

スジボケハシリグモとも比較してみた。ところが、外雌器も単眼も大変よく似ていて、私には区別することができなかった。従ってこのクモは、イオウヒロハシリグモの色彩変異とするよりも、スジボケハシリグモの色彩変異と見るのが妥当ではないかと考えた。スジボケハシリグモについては、何れ詳しく報告するつもりであるから、ここでは立ち入ることを止め、最初の直観通りイオウヒロハシリグモの色彩変異であると仮定し、仮りに、スジプト型イオウヒロハシリグモ(略称スジプト型)と呼んで飼育観察してみることにした。

1975年7月14日、野外から腹部の膨隆した(産卵期の)♀を採集して飼育を始めた。7月17日に産卵。8月1日、卵囊から子グモが出て来た。第1回目の脱皮を終えた子グモ、即ち、第2令蛛である。この子グモたちの色彩・斑紋は、今までに何度か見ていたイオウヒロハシリグモの初生蛛のに大変似ていたのには驚いた。斑紋は、個体により多少の違いは見られたが、基本的なところは皆同じであった。体及

び付属肢は黄色。背甲には巾の広い灰黒色の縦条斑が1対あり、その間白色毛が生えていて白条をなす。腹背の前半には、細い灰黒色条斑が縦に4本並び、それから後半、腹端まで山形斑が並んでいる。山形斑の1つは、両端が側方に長く出て跳ね上り、全体として押しつぶしたW字状を呈している。(②)

上の条斑（及び体色）は、クモの脱皮（成長）に伴って少しずつ変化していったが、特に第5回目の脱皮が終ったもの（第6令蛛）では、斑紋が2つの型に分れたことが明らかに認められた。(③、④)がそれである。第7回目の脱皮が行われたもの（第8令蛛）では、この斑紋の2型の違いは、より明瞭となり、殆ど固定されたように持続せられた。(⑤、⑥)⑥の条斑は、♀親(①)の条斑をそのまま受け継いだものであると言ってよいものである。⑤の斑紋は、イオウヒロハシリグモの多くの幼体で見られる斑紋と全く同じであったことは大きな驚きであった。②の示したW字状斑が、その直ぐ前方の山形斑と連結して棒組みの大きな山形斑(Λ)を作っているのが特徴である。この斑紋をもつ個体をイオウヒロ型イオウヒロハシリグモ（略称イオウヒロ型）と仮称することにした。

上述のように、1腹から生れたクモの色彩・斑紋は、幼体初期の段階で2つの型に分離したのである。即ち、親の色彩・斑紋を受け継いだスジプト型と、孵化当時の色彩・斑紋を強化してきたイオウヒロ型とにである。特に後者は、成長すると体色は濃くなり、斑紋が不明瞭になることは、イオウヒロハシリグモの一般的傾向と同じであることには注目しなければならない。(⑦)

我々は、どうも、このイオウヒロ型を、イオウヒロハシリグモと同定していたのではないかと、素直に反省しなければならないのではなかろうか。言葉を換えれば、同腹の子を同腹の子として認知し得なかったのが、日本の蜘蛛学、否世界の蜘蛛学の現況ではないのかと、おこがましくも思ったのである。それ程、この2型の色彩・斑紋は異っているものであり、他種とせられているクモの色彩・斑紋と同じものをもっているのである。「イオウヒロハシリグモとは？」と、問い直してみる必要にせまられたと私は思う。

さて、給餌動物入手の関係で、16個体の飼育から出発したが、事、志と異なり亜成体になるまでに3個体となってしまった。脱皮に失敗したり、病気(?)になったりで死んでしまったのである。イオウヒロ型最後の1個体も、成体になる直前斃れてしまった。(⑦) 結局、生きのびてその生を完うしたのはスジプト型の♀各1個体(⑧、⑨及び第3図)だけであった。もっと多数を飼育することができていたならば、上述の2型とはまた違った色彩・斑紋を示すものが現われていたのではないかと考えら

第 3 図

第 4 図

れたし、当然現われてもよいと考えられたイオウイロ型の♂が出現しなかったのは残念であった。

スジブト型♂は、1976年6月3日、13回目の脱皮をして成体となった。♀は、6月14日に14回目の脱皮を行って成体となった。そこで、両者の交配を試みた。（第3図）が、どういう理由か♀は♂を拒否した。又、飼育して得てあったイオウイロハシリグモの♂を配したが（第4図）これも拒否した。何度試みても駄目であった。結局、♀は♂を受け入れることなく、不受受精卵を産下してその生を終った。勿論この卵は発生することなく固乾してしまった。

この♂に、野外より採集した幼体を飼育して得ていたイオウイロハシリグモの♀（と、同定したもの。⑩）を配すると（第5図）両者は直ちに交合した。そして、生れた子グモ（⑪）は、親の辿ったと同じ道を順調に進んでいる。6月（1977年）には成体となって、第4代目の子を産む予定である。

以上の飼育観察と、それと平行して進めてきたイオウイロハシリグモ（及びスジブト型）の生態と生活史の研究（これは近い将来報告する予定である。）とを総合して考えると、私の仮称しているスジブト型は、イオウイロハシリグモの色彩変異の1つであり、イオウイロ型は従来いわれてきたイオウイロハシリグモそのものであり、イオウイロハシリグモは色彩多型種であると思う。

分類学の門外漢である私は、「思う。」という段階で筆を置く 公的（分類学上の）な決定は、その道の八木沼健夫博士にお願いしてあるので、何れ博士の報告に接する日があろう。

第 5 図

要 約

（1） その体背にある条斑が，スジプトハシリグモに似たハシリグモがいる．現在分類学上の所属不明の個体である．

（2） このクモの卵囊から生れた子グモを飼育すると，幼体初期の段階で，その色彩及び条斑は2つの型に分れた．1つは母グモと同じであり，他はイオウヒロハシリグモと同じであった．

（3） これらの外部生殖器の形は，イオウヒロハシリグモのそれと大変似ており，私には区別することができなかった．そこで，スジプト型，イオウヒロ型と仮称しておく．

（4） この2つの型は，イオウヒロハシリグモの色彩変異であり，イオウヒロハシリグモは，色彩多型種であると考えた．しかし，分類学上における検討は，八木沼健夫博士にお願いすることにした．